

僕はどうやら、山の頂に来ていようです。そこにはベンチがあり、腰かけて休憩しています。とっても、どうしてここにたどり着いたのかわかりません。「山の上につきました。」と言われて、気づいたら、山の頂にいたということなのです。

「あなたの苦手な人が向こうから歩いてきます」また声が聞こえます。不思議に柔らかく、抗いがたい声です。ちょっと低くて太い感じの声。少なくとも同年代の高くてキーンと耳につく声ではありません。

山頂には霧がかかっています。やがて、その霧の向こうから、人が歩いてくるのが見えました。ゆっくりと歩いてくるその人は、僕にそっくりの人でした。高校生とみえて、詰襟の制服を着ています。神経質そうな感じで、少しうっむきがちで、ソワソワしています。そんな感じが僕そっくりなのです。ちょっと嫌な気がしました。

「その人にもベンチに座ってもらってください」

僕が腰をずらすと、その人が横に座りました。

「あなたのポケットから、その人に食べてもらいたいものを出しましょう」

ポケットをさぐると、いつのまにか何かが入っているようです。

僕はポケットからりんごを取り出しました。彼は僕からりんごを受け取ると、無造作にかぶりついて食べ始めました。飢えていたのでしょうか。一心に食べています。僕はそれを見て、少しうらやましくなりました。

「次に何をあげますか。あなたのポケットには何でも入っています」

また声がします。僕は、もう十分な気がしました。彼は、大きなりんごを丸ごとほおばって、みるみるうちに力が漲っていくように感じました。それを見ていると、なぜか僕のからだにも力が漲ってきました。

「じゃあ、その人にお別れしましょう。何か声をかけてあげてください」

僕は言われるがままに、「さよなら」と声をかけま

した。彼は初めて僕を見て、少し笑いました。血色のいい頬になっていて、さっきの神経質そうな雰囲気が取れて、全体に少し丸くなっているようでした。

「ありがとう」

彼はそういうと、また霧の向こうに立ち去っていききました。

実は僕は、昨日死にたいと思ったのでした。僕は友達がなかなかできません。人とのコミュニケーションもうまく取れません。視力が極端に低下していて、その代わりでしょうか、聴力が敏感すぎるほど敏感です。電車に乗るのが特に苦手です。というのも、あらゆる音が自分に向かってくるようで怖いのです。勉強も苦手です。計画を立てると言われても、立てることができません。課題を出せと言われても、時間ばかりかかってはかどりません。疲れてしまつて、授業中はよく眠気に襲われます。また寝ていると先生に叱られるのですが、好きで寝ているのではないのです。

明日はまたテストがあると思ったら、もう生きて

いるのが辛くなって、死にたいと思ったのです。それで何となくリビングをふらふらしていると、母にどうかしたのかと問われて、どうでもいいやと思つて、死にたいと言ってしまったのです。母は驚いて、学校に電話したようでした。

そして今日、保健室の先生に呼ばれて、「イメージ療法やってみる？」と言われたのです。よくわからなかったけど、断る気力もなく同意しました。そこで出現したのが、先ほどの山頂の風景でした。

どうやら僕は、あの日以来元気になりました。僕の苦手な人は僕自身だったように思います。そして、彼が元気になるのを見て、僕自身も元気になったように思うのです。立ち去るときの彼の、はにかんだような笑顔は、少し可愛かった。僕にも可愛いところがあるのでしょうか。

僕は周りを見回すようになりました。みんな結構必死で、テストの日は青い顔をしている人も多いし、プリントをなくして慌てている人もいる。課題が出せなくて叱られている人も。僕だけじゃなかった。